

「ユーラシア地域大国の比較研究」に 期待すること

長 崎 暢 子 (龍谷大学)

はじめに

ご紹介いただきました長崎です。インドの地域研究をやっております。私たちは1998年(平成10年)から3年間、「現代南アジアの構造変動とネットワーク—多元的共生社会の発展モデルを求めて」という名前でインドを含む南アジアに関する、かなり包括的な研究を実施しました。特定領域研究というカテゴリーのプロジェクトでした。今日はその時の経験を話して欲しい、という山根聡先生からのご依頼で参りました。そこで、このときに試みたことと、そこで実現できたことや、逆に出来なかったことをまずお話しします。そして、今回のプロジェクトは、その後の南アジア関係の研究プロジェクトのなかでも非常に大きく、重要であるので、本プロジェクトに何を期待するかということについてお話ししたいと思います。

私たちが以前特定領域研究に取り組んだ時には、インドと中国とロシアの三国を比較するなどということは全然想像したこともありませんでした。しかし、今こうして考えると、この三国を比較するアイデアは本当に興味深く、本研究に大きな期待を寄せています。

構造変化をどうとらえるか。

まず、「南アジアの構造変動」で取り組んだ第一の問題は、当時のインドに起こっていた大きな構造変化です。一般に80年代ぐらいまでは、現代インドについては、貧困のイメージが先立ち、「悠久不変」のインドだとか、「停滞したインド」だとか言われていました。それが今ではすっかり様変わりようです。IT産業のインドとか人材回廊のインド、台頭する地域大国とまで言われるようになりました。イメージが逆転してしまいました。この大きな変化が現れたきっかけは、90年代における経済の自由化、市場の解放でした。しかし、自由化の流れの方向は、80年代の後半ぐらいから緑の革命といった形で、少しずつ見え始めていました。つまりこの流れは、土地改革、協同組合的農業、保護主義的で閉鎖的な計画経済といった、いわゆる社会主義的経済政策を目指していた独立以来の一連の流れ

が次第に捨てられ、緑の革命や経済自由化といった資本主義的な方向へと切り換えられていく大きな変化の過程だったことが分かります。その自由化の時代を経て、今のようにインドが、問題を孕みつつも注目される結果につながってきたように思います。

私たちが1998年から特定領域研究を行ったのは、まさにこの経済改革を中心とした変化が起こりつつある時で、インドのこの変化をどう見るのかということに焦点を当てて行いました。その意味で、「南アジアの構造変動」プロジェクトは、この構造変動に総合的に、真正面からとりくんだ、日本で最初の大きなプロジェクトだったと思います。インド社会の大きな構造変動を総合的にとらえるために、3年間で延べ120人を超える南アジア研究者が集まって、議論を行いました。この変化をどう位置づけるのか、という争点をめぐって、激しい議論が何度も闘わされたことを、覚えていられる方も多いと思います。

ただ、その場合、以下に申し上げるように政治、経済、環境、ジェンダー、世界システムといった多角的視点から全体を見ようとしたからこそ、これは非常に大きな構造変動なのだ、と問題を捉えることが出来たと思っています。

全体を捉える多角的視点と方法

そこで第二にやろうとしたことは、全体を捉える多角的な視点をつくること、それを支える方法的な変革です。南アジアでは、地域ごとの多様性が顕著であるためか、それぞれ個別の研究では素晴らしいものがあったとしても、全体としてはひどく分かりにくいものになっていました。研究者も、インドに関する研究を一緒に作り上げていこう、みんなで問題意識を共有しよう、という雰囲気があまりなかったように思います。研究条件のよい人々が自分のやりたい研究を仲間内でやっている、という感じでした。

今回のプロジェクト「地域大国の比較研究」は、以前の特定研究以来インドを「地域大国」としてみる、つまり全体像をもつかもうというものであり、且つそれをグローバルな視点から他の2つの地域大国と比較するというものですから、研究の出発点からして、すでに格段に進んでいると思われれます。本当に喜ばしいことに思っています。

私たちが行った特定研究では、全体を多角的に捉えるために、まず、班構成を7班としました。総括班（現代南アジアの動態的変化の総合的考察）は、運営会議の取りまとめを含む総合的な内容を扱い、資史料収集・整理班もこの中に組み入れました。それから1班が経済（南アジア経済発展における計画と市場）、2班が政治（南アジアにおける国民国家システムの変容）、そして3班が環境（南アジアにおける環境変動と開発）。当時はまだほとんど取り上げられていなかった環境をメインの問題のひとつに掲げるという冒険をしました。それから4班が社会・文化（南アジアの生活世界と想像力）です。5班がジェンダー（南アジアにおけるジェンダーと構造変動）。ここでもそれまでメイン・ストリームではほとん

ど注意されていなかったジェンダーを取り上げました。それから6班がインド洋とネットワーク（環インド洋世界のネットワーク）。ここでは、インド洋という海の視点からインドを見ることと、ネットワークという視点を設定したわけです。最後の7班（南アジアと世界システム）には、世界システムの中で南アジアを捉えようという視点で、そこに座っている秋田茂先生を代表に研究をしていただきました。このように政治、経済、社会、ジェンダー、環境、世界システムといった多岐にわたるテーマに沿って、全体の構造変化をとらえる研究を始めたわけです。

計画を進める上では、いろいろ無理なこともありました。しかし、各分野が他分野と協力して全体を捉えようとしたからこそ、見えるものがあつたと思っています。最終的には『現代南アジア』という全6巻の、以下のような書物を東大出版会から2003年に発行することができました。一巻は事実上、研究史と問題の所在の同定です。あとは、経済、政治、環境、社会（ジェンダー）、世界の中のインド、というように構成されています。叢書をつくるうえでは、1) 構造的視点、2) ネットワークの視点、3) 比較の視点、4) 長期的歴史変動の視点という、四つの基本的な視点を掲げました。比較の視点は、皆様がこれからなさるような比較に比べれば圧倒的に弱いものですが、それでも他地域との比較をしようという姿勢のあつたことが、この特定領域研究の成功につながつたと思っています。

叢書の内容は以下のとおりです。

第一巻 長崎暢子編「地域研究への招待」

第二巻 絵所秀紀編「経済自由化のゆくえ」

第三巻 堀本武功・広瀬崇子編「民主主義への取り組み」

第四巻 柳沢悠編「開発と環境」

第五巻 小谷汪之編「社会・文化・ジェンダー」

第六巻 秋田茂・水島司編「世界システムとネットワーク」

研究組織上の狙い

次に研究組織上の新しい試みについてお話したいと思います。このプロジェクトのニューズレター第1号で、私はプロジェクトの組織上の狙いについて書きました。ここでは、それに沿ってご紹介します。

先ほど述べたように、日本では南アジア研究は、中国その他に比べると圧倒的に研究者数が少ないのです。そのためか、南アジア研究は、国公立の研究所の人々が行いうるけれども、大学の学部では一部を除き、南アジア研究者といえども教育しかできない、という観念が支配的でした。そのためか、個々に優れた研究者はおられても、日本中の南アジア研究・教育者が一堂に会して、共同で研究に取り組むという経験は他領域に比べて乏しか

ったのです。また、歴史研究者の数に比べて、現代インドの研究者はもっと少ないという事情もありました。

そこでまず、現代インド研究を遂行するために、現在ある人的資源を活用して、歴史研究を現代研究と結びつけようと提案しました。これは大きな反対にあいましたが、それでも最終的には皆さんが協力してくださいました。叢書をごらんになると、いわゆる歴史研究者が現代研究にも取り組み、二つの領域が結びついたことがお分かりと思います。

第二には、新たな研究者層を発掘して資金を配分し、発信可能な機会をつくることに力を入れました。女性、若手研究者、さらに研究所、研究機関の人たちだけでなく、教育に多くの時間を割かれる学部教育の中で格闘しておられる研究者、東京以外で優れた研究活動を行っている方々、さらに私立大学の研究者たち、実務担当者やNGO関係者と一緒に研究しましょう、と努力したつもりです。そのために研究会の日程にも工夫しました。また、毎年公募研究というのを作って、よい研究プラン作って応募した方に資金助成をしたり、若手研究者の会を組織した方たちにも、若干の資金助成を特別に行ったりしました。これは、常に周辺研究者にも道を開いておきたいという考えから行いました。こうした働きかけの結果、非常に多くの人に参加してくださる研究となりました。やはり国民の税金を使ってやる以上は、研究の裾野を広げるのも、研究の社会還元という重要な使命かと思っています。

その意味では、今回の北大の新領域研究は、研究の地方分権というか、東京以外の特色ある研究が活発であることを示す、素晴らしいものだと思っております。

情報の共有化

私たちが特定研究を始めた当時は、南アジアの優れた研究や貴重な史資料が日本の有力大学にあっても、誰でも容易に見られるという状態ではありませんでした。そのため、もっと東京以外の地域や一般に対しても開かれたものにしたい、と思っていました。そこで、研究交流を盛んにしたり、進行中のものも含めて研究活動の内容を、国内外のニューズレターやワーキングペーパー、雑誌、電子媒体などを通して、積極的に発信したりすることを目指しました。これは残念ながら、あまり成功したとは言えません。しかし、研究者間の交流を目標に掲げて、一生懸命取り組んだということは言えると思います。

なお成果の還元ということに関して、資料を収集するだけでなく、整理して公開する班を総括班内部に設けたのですが、買ったものを整理して公開するという作業は、これも実はあまりうまくいきませんでした。私が今回のユーラシア地域大国の比較研究に期待することの一つとして、できれば購入された資料を整理して、公開し、皆が利用しやすい形にすることに力を入れていただきたいと思います。

「南アジアの構造変動」の成果からみる本プロジェクトの意義

「南アジアの構造変動」の内容的な成果から本プロジェクトとのつながりを考えてみると、こういうことになると思います。私たちのプロジェクトでは、南アジアにおける大きな変化を、ポスト・コロニアル的背景のなかで総合的に検討しようとするものでした。すると、1970年代ころまでのインド経済の停滞に比べ、90年代にはインド独立以来初めてといえる大きな構造変動が起こっていることが疑いようもない、ということが分かってきました。しかもその意味は、政治、経済、国際関係、社会、文化、思想、環境、など諸領域における視点から総合的に研究を遂行したからこそ、明らかになるものだったのです。

結論的にいうと、インドは1991年に、湾岸戦争を契機とする債務危機を克服するため、本格的な経済自由化路線に転換します。市場が開放され、資本の自由化や規制緩和が行われることによって、基本的にはそれまでの重工業や輸入代替工業を優先しながら、閉鎖的な市場をもつ社会主義型社会と呼ばれるような経済体制から転換していきます。この経済自由化が進められていくと同時に、高い経済成長率が実現されていくようになり、いわゆる停滞のインドから地域大国インドへと大きな変貌をとげていったのです。

政治の分野でもこれに連動する大きな変化が起こっていました。それは、独立以来続いていた、ネルー流の社会民主主義的な性格を帯びた国民会議派の「一党優位体制」と言われる政治体制が崩壊したことでした。1990年代には、インド人民党のような政党が次第に力を伸ばし、1998年～2004年には、インド人民党を中心とした国民民主連盟なる連立政権が政権を掌握する、といった事態さえ起こります。それ以降は、一党優位体制にかわり、(変則的) 二大政党制とも言えるような政治体制が、現在まで継続しているわけなのです。

しかもこの変化は、世界の政治経済に視野を広げれば、世界的変化と連動していると考えるのが妥当なのではないでしょうか。すなわち、1989年にはソ連軍のアフガニスタンからの撤退、そして「ベルリンの壁」の崩壊がおきました。ついで1991年にはソ連も崩壊して、第二次大戦後の世界を規定してきた冷戦体制が終結するという大きな変化が起こっていたわけです。これは、1917年のロシア革命の成功以来、世界の人民の目標であった社会主義革命とその建設が、もはや資本主義諸国の人民の目標でなくなってしまったことを意味します。この世界的規模での変化とインドの政治・経済の構造的変化が、全く無関係だとは言えません。インドの思想界にも、政治、経済にも根源的な変化が起こるのは、ある意味では当然のことだったといえるでしょう。ちなみに、このソ連の崩壊と冷戦体制の終焉があったからこそ、今回の新学術領域のような、ロシアと中国とインドを地域大国として同等な地平で比較するという新しい研究設定も可能になったのではないのでしょうか。

このほか、社会、環インド洋、ジェンダー、環境などに関して、新しく得られた知見も多くありますが、詳しくは、叢書を読んで頂きたいと思います。このように、80年代の後

半から90年代にかけて、南アジア世界のあらゆる分野で起こっていた大きな変化が、社会主義世界の解体や、ソ連からロシアへの移行と関係があったとすると、今回の新学術領域の課題と特定領域の研究とは、互いに深い関係にあると言えます。

私たちのプロジェクトにおいては、このときのインドの経済変化をどう見るかという点で、深刻な理論的対立が生まれました。興味深いのは、研究の成果として刊行した『現代南アジア』という叢書の第2巻のタイトルで、「経済自由化のゆくえ」となっています。実は、最初にこの経済班をつくったときは、「計画と市場」でした。つまり、当初は経済自由化、すなわち市場化の試みは失敗して、再び計画経済に戻るだろうという意見をもつ有力メンバーが結構いたからです。しかし研究が本格的にすすむうちに、経済自由化の動きはもう後戻りしないということが明白になってきて、途中から「計画から市場へ」というタイトルに変えました。そして最終的には、「計画」という言葉を全く落としてしまって、叢書では「経済自由化のゆくえ」というものに行き着いたわけです。この辺りに当時起こった変化が最も劇的に現われているように思います。

本研究プロジェクトに期待すること

最後に、本プロジェクト期待することについて述べたいと思います。

「南アジアの構造変動」で述べられている変化は、それらを総合的にみると同時に、80年代から90年代にかけて生じた世界的な転換との比較の中に置いたとき、初めて見えてくるものだったと申しました。つまり、(国際)比較という方法の有効性は、もっと認知され、方法的にもっと練磨されていく必要があると思います。その意味で、本プロジェクトは、本当に期待できると思うのです。

比較がいかに大事かということは、例えば次のことから言えると思います。インドは第二次大戦が終わる少し前か直後の段階では、アジアの中では相対的に工業化の進んでいる国の一つでした。ところが、第二次世界大戦後の冷戦期に、アジアが二極分化していく中で、インドは工業化に必要な技術や質の高い労働力、法律的なインフラなどの点で、確実に国際競争力を失っていきます。一方、日本を始めNIESやASEAN諸国は、その間にどんどん力を伸ばしていきました。そして1979年には、中国が経済自由化に踏み切り、その後の目覚ましい高度成長を実現するに至っています。他方、ロシアでは計画経済が破綻し、80年代の後半から90年代にかけてソ連の崩壊をとまなう非常に困難な道のりをたどることになります。こうしたソ連の崩壊や1979年の中国における自由化、また1991年のインドにおける自由化について考えるとき、国際的な環境を視野に入れた比較を行ってこそ、見えてくるものがあると思います。このことが、今回のプロジェクトの成果に期待する大きな理由となっています。

これまでインドを中国と比較する試みは、多くのインド研究者によってなされてきました。中ソの比較研究も、かなりなされてきたのではないかと思います。しかし、これら三国を比較する本格的な考察は、これまでほとんどなかっただけに、素晴らしい試みであると私は思っております。

ロシア、中国、インドを比較するのであれば、どうしてもやはり、2つのことを期待したくなります。第一は、それぞれの地域の人々のイスラームに対する態度についてです。欧米とは異なる、インド、中国、ロシアにおけるイスラームへの態度を比較するという事は、こちらに山根聡先生が居られるだけに、とても水準の高いものになるでしょう。第二は、社会主義のそれぞれの地域でのありようを比較していただきたいと思います。つまり、産業革命以降の19世紀後半、ロシアと中国、インドのそれぞれの社会で登場してきた労働者、人民についての比較です。そして、それらを扱うマルクス主義や社会主義の思想と運動が、それぞれの社会でどう展開していったのか、どんな問題が生じて、どうして駄目になったのかという問題を比較すれば、19世紀から20世紀後半に生まれた社会思想の問題を、少しでも明らかにすることができるのではないかと期待します。

また、現在では新しい状況が生じています。例えば、インドの知識人の間では、今もサバルタン・スタディーズという形で、マルクス主義が依然として有力です。これを考えると、ソ連崩壊後のロシアや中国では、社会主義やマルクス主義の思想がどういう形で生き延びようとしているのか、そこでの問題はなにか、という現代の思想的傾向に関する比較も、ぜひやっていただきたいですね。つまり、社会主義的革命思想が崩壊したかに見える現在、人々はいったいどのような形で未来を描こうとしているのか、ということについての比較です。

さらに、三国の比較という場合、これまではロシアから中国・インドに与えられた影響について学ばれることはあったと思うのですが、逆にインドから他の国に与えられた影響についても是非考えていただきたいです。インドで大切にされている原理・原則——例えば、多元的共生という多様性を認める思想が、中国やロシアでは、どのように考えられているのだろうか。この多元的共生というのは、民族独立運動の中でガンディーが1920年代に言った言葉ですが、おそらくこの理念に基づいて、インドでは国語が作られず、多言語の共存が成り立っています。また多元的共生の理念は、多宗教・多民族を擁するインドの、政治や制度の基盤である民主主義の柱となっていて、今日のインド政治を相対的に安定したものにしてしています。こうしたインドの多様性を尊重する原則は、ロシアや中国ではどのように受け止められているのだろうか、ということに関心があります。マルクス主義やキリスト教は、素人目には一元論、一神教的世界に見えますので、その思想の中に、こうした多元的共生の考え方は、どのような形で受け入れられることになるのか、などを知りたいですね。

同じように、頭脳還流が話題となっているディアスポラの問題もあります。印僑と華僑の比較などはすでに行われていますが、互いにその様子はずいぶん違っています。さらに、ロシア人の移民を比較に加えてみると何が見えてくるかということも、大変興味深い問題だと思えます。

それから、「地域大国」というときの自らの位置づけ方も比較できるのではないのでしょうか。例えば今のインドでは、「地域大国」といっても、人によっては「グローバル・サバルタン」といって、自分たちインドはグローバルな中ではサバルタンの立場にある、つまり、差別されていると発言する国際政治の専門家もいるそうですが、中国やロシアでは、「地域大国」の位置づけは、やはり同様なのでしょうか。

以上、なにか、「期待」が大きすぎて、お願いばかりで誠に無責任なご挨拶になりました。

これで終わらせていただきます。どうもありがとうございました。